2020年1月19日　中原キリスト教会・主日礼拝

**「主の例祭」**

聖書箇所：レビ記23:22

あなたがたの土地の収穫を刈り入れるとき、あなたは刈るときに、畑の隅まで刈ってはならない。あなたの収穫の落ち穂も集めてはならない。貧しい者と在留異国人のために、それらを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日はレビ記に示されている「お祭り」についてみていきたい、と思います。お渡ししたユダヤの祝祭日の表を見ながら話を聞いていただきたい、と思います。お読みいただいた聖書の個所は「七週の祭り」の一節です。「七週の祭り」はキリスト教では「ペンテコステ」と言われる日で「聖霊降臨祭」と言われています。「七週の祭り」はそもそもは小麦の収穫期にあたり、その収穫祭です。レビ記23:22は、貧しい人が収穫後の落穂をひろう余地を残しておきなさい、と言っています。ミレーの「落穂ひろい」はここから着想されたものと考えられます。

　今日はレビ記23章にあげられている祝祭日を中心にみていき、イスラエルにおける祝祭日の特徴を確認しておきたい、と思います。まず、最初には「安息日」が挙げられています。「シャバット」と言い「休む」という意味です。23:3「六日間は仕事をしてもよい。しかし七日目は全き休みの安息、聖なる会合の日である。あなたがたは、いっさいの仕事をしてはならない。この日はあなたがたがどこに住んでいても主の安息日である。」とあります。これは創世記の天地創造のところを受けたもので出エジプト記31:14には「これは、あなたがたにとって聖なるものであるから、あなたがたはこの安息を守らなければならない。これを汚す者は必ず殺されなければならない。この安息中に仕事をする者は、だれでも、その民から断ち切られる。」とあり、安息日は①聖なるものであり②違反は死刑に値し③イスラエルの民から絶たれる、とあります。聖なるものである、というのは「聖別」されなければならない、ということであり、通常の日とは区別され、神に捧げる時間としなければならない、ということです。「時間の聖別」と言われます。違反は死刑に値する、という時の「死」はヘブル語で「mu:t」であり、十戒の「殺してはならない」の「ra:tsaha」とは別の言葉です。イスラエルで死刑は石打ちの刑が想定されており、これは、罪をイスラエル共同体の罪とし、共同体の全員が死刑執行に参加することを意味しています。また、「民から絶たれる」というのは共同体の墓に入れない、ということでイスラエル共同体の一人としての扱いを将来においてされない、ことを意味します。これは肉の死にとどまらず霊の死も含み、永遠の滅びを意味します。

ここに示されている「時間の聖別」はこれから話す、すべての祝祭日に共通していることで、その時間を神に捧げる、ということです。そして「安息日順守」は十戒の一つとなり、絶対順守の戒律になっていきます。ユダヤ人の一日は日没から翌日の日没までですが、安息日は金曜日の日没・夕方から土曜日の日没までです。実質的には土曜日が安息日と言ってよいでしょう。ちなみにイスラムの安息日は金曜日です。キリスト教の場合は日曜日がそれにあたる、と言えそうです。この安息日規定は次第に具体化され、39の「べからず項目」に発展していきます。労働の禁止をはじめ人間の生活にともなうすべての動きが禁止されています。薬を調合することや、医療行為も原則禁止です。動く距離もシナゴーグに行くまでの距離しか認められません。戦争も安息日には禁止ということで戦闘停止したため殺された、という話が第一マカバイ書に誇らしげに語られています。この安息日に麦の穂を摘んで食べた、として主イエスの弟子がパリサイ人により非難された、という話が新約聖書に載っています。当時から「安息日」にしてはならない事の範囲については意見の対立があり、現在に至ってはその意見の対立はさらに広くなっています。しかし、休息の時とし、祈りと賛美と聖書の学びの時とする、という基本は生きています。また金曜日の夕食は特別な夕食であり、「輪型のパン」に塩を振って食べます。この家族で一緒に食事をする、というところに祝祭日の特徴もあります。安息日は通常「主の例祭」のなかには入れられませんが、共通の特徴を備えており、しかも順守が強く求められていることからレビ記23章の最初にあげられている、のだと思われます。

次は過越しの祭りです。これは出エジプトの時に神様がエジプトを懲らしめるために初子を殺す、という時、鴨居に血を塗ってあるユダヤ人の家だけは通り過ごす、という話から名付けられたものです。ぺサハと言います。「過ぎ越す」という意味です。ユダヤ暦の1月15日から一週間です。過越しそのものは夜ですので、14日の夕方からです。そもそもは農業祭であったようで、「ハグ・ハマツォット」とも呼ばれます。「ハグ」というのは「神が定めた祭り」ということで、特別な意味があります。「ハマッツォト」とは「種入れぬパン」「マッツァー」の複数形に冠詞がついたもので、即ち酵母の入っていないパンを食べることが義務付けられています。今でいう「ベーグル」です。そもそもは農業祭であったことはレビ記23:9以降に「初穂の束」の儀式が書かれていることからわかります。祭司はそれの束を主に向かって揺り動かす、と書かれています。この「揺り動かす」というのは特別な意味を持っている言葉で、23:30のペンテコステのところにも出てきます。「ハグ」と言われる三大祭りのひとつです。他は、「シャブオット」七週の祭り、「スコット」仮庵の祭り、でキリスト教の、イースター、ペンテコステ、感謝祭に対応しています。祭りの前にパンだねを除く大掃除も義務です。この時の夕食の次第は「順序」という意味のセデルと呼ばれます。主イエスの最後の晩餐はこの時の夕食です。我々の聖餐式の原型です。セデルによる食事の品は六つあり、苦い菜「苦菜（にがな）」が特徴です。エジプトでの奴隷の苦難を思い起こす、という意味です。セデルの最後は「来年こそはエルサレムで」と言いますが、これは離散の民の将来への希望の表現です。エリヤの再来のための特別なワイン・グラスを用意することも定められています。また、食事の用意ができない貧しい人を呼ぶこともしきたり、となっています。ここに、「ハグ」祭りの特徴も出ています。イスラエルの過去の出来事を思い起こし、主なる神への賛美と祈りを捧げ、将来に対する希望を願う、ということです。過去を現在によみがえらせ、同時に主なる神の約束が実現することへの確信を告白する、ということです。難しい言い方をすると、過去の現在化が「記憶」により現実化し、将来の現在化が「希望」によって現実化する、という言い方もできようか、と思います。

このあと50日後が「シャブオット」七週の祭り、です。ユダヤ暦の3月「シバン」の6日です。最初に本日の聖書個所として挙げた祭りです。50日という意味のギリシャ語から「ペンテコステ」と言われます。「初穂の祭り」「刈り入れの祭り」ともいわれるようにそもそもは農業祭であったと推測されます。大麦、小麦は、11-12月に種まきがされ、この頃、太陽暦で4-5月に収穫されます。その時、落穂は貧しい人の取り分としてやらなければならない、と言われているのです。旧約聖書ルツ記が読まれます。落穂を拾っている異邦人ルツをボアズが見初めて、妻とする、という話です。言い伝えではこの日にモーセが主なる神より「トーラー」律法、即ち十戒が与えられた、と言われています。また、13-16歳までの子供が自分の意思でユダヤ教を選ぶ、という印（しるし）の堅信礼を行います。「バル・ミツバ」という成人式のあとの儀式です。また3歳になった男の子の髪の毛を切る、という儀式もあるそうです。この祭りにも、そもそもの農業祭に聖書における出来事が重ねあわされ、イスラエルの信仰の表れの一つとしての祭りとなる、という性格が示されています。

次はユダヤ暦7月ティシュレーの1日（ついたち）が「ラッパを吹きならして記念する日」として定められています。これは新年の祭りです。ユダヤ教は新年はユダヤ暦1月ニサンの月と7月ティシュレーの月と二度ありますが通常新年の祝いとされているのはティシュレーの1日のほうです。「ローシュ・ハシャナ」年（とし）の頭と言われています。7という数字が聖なる数とされていることに対応しています。太陽暦では9月のことが多いのですが、アメリカで国家予算のスタートや新学年のスタートが9月であることはこれと関係しています。新年ですから、甘いものを食べ「新年が甘い年である」を祈願します。角笛・ショファールが吹き鳴らされます。角笛は雄羊の角で作られ、創世記12章のイサク奉献の時の雄羊に由来しています。ちなみに旧約聖書では家畜にランクがあり、羊、牛、やぎ、の順です。牛はシナイ山のふもとでの「金の牛」の偶像礼拝に通じており、あまり好まれません。

この月の10日、太陽暦では9月末から10月初めにあるのが「ヨム・キプール」贖罪日、と言われる日です。「畏れの日」とか「裁きの日」とか言われます。旧約聖書のヨナ書が読まれます。罪多き町ニネベが神の裁きの前で悔い改め、裁きを逃れることができた、ことや、預言をするのを逃げていたヨナが悔い改めて予言をするようになるとかに示されているように「悔い改め」がテーマです。新年から贖罪日までの10日間は「畏れの日々」と言われ、悔い改め「ティシュヴァ―」の時です。この時は皆、断食をしなければなりません。断食は「身を悩ます」ということで、苦難を耐え忍ぶことを意味します。24時間の断食です。カバロットと言って、鶏を頭の上で三回振り回すという慣習も作られていきました。カバロットというのは「贖い」の意味ですが、罪を「贖う」ことで、キリスト教徒にとっては主イエスの罪の贖い、を思い出させます。ユダヤ人の祭りの古い形は二匹の雄山羊の一頭に罪を背負わせて荒野に放つ、という儀式です。レビ記16章に細かく記されています。これはアザゼルという荒野にいる悪霊に雄山羊を捧げるもの、とされています。これが罪をおしつけて犠牲にする、という意味の「ScapeGoat」の由来です。この贖罪日の祈りは「コル・ニドレイ」と言われ、有名な音楽家が作曲し演奏をしています。宗教音楽の一つと登場します。「なんじ解き放たれたり」という解放の詩です。23:30に「その日のうちに仕事を少しでもする者はだれでも、わたしはその者を、彼の民の間から滅ぼす。」とあり、これを守ることは絶対的なことである、ことが示されています。

ついで23:33以降に記載されているのがティシュレーの15日、贖罪の日から5日後が「スコット」仮庵の祭りです。やはり農業祭に由来すると考えられ、ぶどうやオリーブの収穫期にあたります。仮庵のことを「スカー」と言いますがその複数形が「スコット」です。「ハグ・ハーシーフ」取り入れの祭りとも呼ばれます。ハグは三大祭りを指していますが単に「ハグ」と言えばこの仮庵の祭り、を指すようです。これもエルサレムに年三回のぼれ、といわれた三大祭りの一つです。スコットに2日目にシロアムの池から水を運び祭壇に注ぐ、という儀式がありますが。スコットの時期は乾期にあたるので雨ごいの祈り、と関連しているのではないか、と言われています。ヨハネ福音書7:38の「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」とのみ言葉はこの祭りの儀式と関連している、と思われます。仮庵というのはイスラエルの民が荒野をさまよう時に住まいとした粗末な小屋のことです。屋根も夜、星が透けて見えるようなものだった、とされています。レビ記23:40に祭りに飾られる植物が定められています。エトログ（レモン）、ルーラヴ（棕櫚の葉）、ハダス（ミルトス）、アラボット（柳）となっています。香りがしたりしなかったり、実がなるものだったりならないものだったり、いろいろな植物が組み合わされています。子供たちが楽しむ喜びの祭りです。この仮庵の住まいに子供達も泊まるのです。昔サンディエゴの家の庭に三角屋根の小屋があって、そこで子供たちが時々泊まっていましたが、スコットのアイディアから三角屋根の小屋を大家が作ったのかもしれません。最後の七日目は「ホシャナ・ラバー」と呼ばれ、喜びをもって行列をして歩くのです。歌う歌は詩編118:25の「ホシャナ」です。主イエスのエルサレム入場の時の民衆の歓迎の言葉です。「主よ、救い賜え」です。

以上がレビ記23章に記されている祝祭日ですが、これ以外にも多数の祝祭日があります。そのうち、いくつかをご説明します。まず、ユダヤ暦5月9日の「ティシャ・ベアブ」神殿崩壊日です。BC586年に新バビロニアによって第一神殿が破壊された日を記憶し、思い起こす日です。神殿崩壊はBC70年の第一次ユダヤ戦争におけるローマによる神殿破壊も含んでいます。要するに離散の民としての悲劇的歴史の出発点であった日です。「哀歌」が読まれます。更にはAD135年の第二次ユダヤ戦争による悲劇、AD1275年のイギリスでのユダヤ人追放、AD1492年のスペインにおけるユダヤ人追放も記憶にとどめる日、とされています。

次は「シムハット・トーラー」律法の祝典の日です。スコット・仮庵の祭りの翌日です。ユダヤ人の礼拝は一年かけてモーセ五書をよむことになっていますが、この日はそれが全部読み終わる日です。五書は創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五つですがかなりの量ですので週一回の安息日に読み上げられる聖書の長さはかなりです。この日はトーラーの巻物を中心にして踊りまくる日とされています。巻物と言うのは羊皮紙に書いたものでかなり大きなものです。東京神学大学の図書館に見本が置いてあります。

それからわすれてならないのが「ハヌカ」光の祭りです。これはエズラ、ネヘミヤが再建した第二神殿がシリアのエピファネス王により汚されたのをBC164年12月14日に清めたうえで再奉献した、ということに基づくものです。外典の第一マカベア書に記されています。4:52-54に「第百四十八年の第九の月――キスレウの月――の二十五日に、彼らは朝早く起き、焼き尽くす献げ物のための新しい祭壇の上に律法に従っていけにえを供えた。異教徒が祭壇を汚したのと同じ日、同じ時に、歌と琴、竪琴とシンバルに合わせて、その日に祭壇を新たに奉献した。」と記されています。ユダヤ暦9月キスレヴ月の25日で太陽暦の12月初めです。この時の燭台は通常の7つの台の「メノラー」ではなく9つの台がある「ハヌキヤ」と呼ばれる燭台です。我々の待降節の時の燭台は7つのメノラーと同じものです。ハヌカには子供たちはお小遣いをもらえることになっています。これを「ハヌカ・ゲルト」と言います。油で揚げたポテト・パンケーキの「ラトケス」、「スビボン」というこまで遊ぶ、ことなどあり、日本のお正月みたいです。親戚が集まる、ということもあります。ハヌカの時期はキリスト教のクリスマスに近い日ですのでキリスト教のクリスマス、ユダヤ人のハヌカが対比されます。どちらも喜びの時です。昔、NewYorkにいたころ、クリスマスの季節には会社のツリーを飾っていましたが、ユダヤ人のスタッフから、自分たちはハヌカを祝いたい、と言われ許可したことがあります。クリスマス・ツリーのあるところにハヌカの壁紙を張っているのですからちょっと奇妙な感じでした。

もう一つが「プリム」というエステル記の祭りです。エステルという若い女性がペルシャに居たユダヤ民族を救う話に基づいています。プリムという言葉は「くじ」という意味ですが、ユダヤ人絶滅を計画しハマンという男がユダヤ人絶滅の日を決めるのに「くじ」を用いた、ということからこの名がついています。プリムの日は音のでるものを持ってきて騒ぐ日となっていて、聖書朗読で「ハマン」の名が出ると、がらがらで音を立て名前が聞こえないようにする、というものです。この日のことについてタルムードは「めちゃくちゃに酔っ払いなさい」と書いてあるそうです。プリムに食べるお菓子は「ハマンのポケット」という三角形の形のクッキーです。この日は施しをすることが義務とされています。南米のカーニバルに通じるような祭りです。どこの国でも羽目をはずすようなお祭りはあるものです。

その他、月の新月のお祝い、とか樹木の新年のお祝いとかもあります。現代になってからの記念日ではユダヤ暦2月イヤールの5日のイスラエル独立記念日、その前日の戦没者記念日、ユダヤ暦1月ニサンの月の27日のホロコースト記念日「ショアの日」もあります。

聖書に根拠のある「主の例祭」と言われている日は「時の聖別」に関連しています。聖なる日、なのです。この「例祭」という言葉は、ヘブル語は「mo:ed」と言い、そもそもの意味は「集まり」です。主なる神の名においてイスラエルが集まることです。そうすると、キリスト教徒の日曜礼拝もここでいう「mo:ed」になります。安息日の伝統を受けついだ日です。多数の「mo:ed」の内、三大祭りは「hag」と言いますが、エルサレムへの巡礼が勧められている日です。庶民には年に三回エルサレムに行くことなど不可能でしたでしょう。福音書を見ると、主イエスが宣教を開始されてからはこの巡礼の旅を守っていたように思えます。ユダヤ人の祭りには「喜び」「歓喜」「楽しみ」の要素があります。贖罪日のような楽しみと無関係な日でもすぐあとにスコット・仮庵の祭りが控えています。神殿崩壊日の後に新年の祝いがあります。おそらく、この時間の聖別たる主の例祭には「楽しみ」という主の計らいの時が備えられている、ということだと思います。そして三大祭りの発生由来に示されているように地場の農業祭と結びついて伝統となった祭りもあります。南米におけるキリスト教の定着には地場のお祭りをキリスト教に取り込んだ、という要素があると思われます。農業祭は豊穣神信仰に結び付きやすいので警戒を持つ必要はあるのですが、豊作を祈願・感謝すること自身は神の恵みを祈願・感謝することであり、信仰に反することではありません。プロテスタント信仰は、毎日が聖人の祝祭日というカソリックの宗教的やり方への反発から祝祭日を極端に減らしたきらいがあります。カソリックの祝祭日のいくつかはプロテスタントでも取り入れても良いのかもしれません。日本の神道や仏教の祝い事でも共同の祝祭日にして良い日もあるかもしれません。神道行事で国家神道を思わせるものには国家崇拝という偶像礼拝につながるものであり、キリスト者は拒絶すべきこととおもわれます。

もう一つの「楽しみ」という部分に関しても、プロテスタントはもう少し、ゆるくなっても良いように思います。禁酒法の流れからくるアルコールを抜いたワインとかは「やりすぎ」という感もあります。主イエスもワインをたしなむのになんらの消極的なこともおっしゃっていません。クリスマスの時の子供へのプレゼントとかイースターの時の卵とかも定着していますが、キリスト教以外の由来の祭りも特段問題ないものにはクリスチャンも参加しているのが実際と思います。お正月の遊びやお年玉などです。ではおみこし担ぎはどうだ、七五三はどうか、等々、子供に関連したことでも多くの疑問がわいてきます。いつか機会があれば韓国のクリスチャンはどうしているのか聞いてみたい、と思います。

ユダヤ人たちは自分たちの祝祭日を固守し今に至っています。これは律法順守と結びついています。キリスト教はユダヤ人流の律法順守はしていません。ユダヤ人は離散の民となり、あちこちで大変な迫害に逢いながらもその信仰集団を維持してきました。それにはユダヤ教の祭儀を固守し、自分たちのやり方に執着したことが大いに役立っていたことは間違いありません。これがなければ、民族は霧散し、今、ユダヤ民族と言われるような人々はいなくなっていたでしょう。しかし、そのことが周りと歩調を合わせることはせず、誤解も受け、迫害される原因にもなっていた、ということも疑いありません。捕囚の民となって以降のユダヤ人は律法を守ることによって、主なる神が恵みを与えられる、ということで、律法の内容いかんではなく「聖書で神が命じている」というただ一つのことから、これを守ろうとしてきたのです。彼らから見ると、主イエスのように「律法の心に遡れ」ということは、文字通り守ろうとしている自分たちにとっては耐えられなかったのです。祭儀は宗教行為の大きな柱です。軽んずることは許されませんが、その適用は単なる文字通りの内容以上の解釈が求められ、そのほうが主の御心にかなう、ということもあるのです。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の礼拝の時を感謝いたします。レビ記のなかから「聖別された時」としてのイスラエルの祭りのことを学びました。過去の記憶の呼び覚ましの時としての祭り、また賛美と祈りにおいて希望が必ず現実のものとなる、という信仰の告白としての祭りのことを知りました。私たちが祭りを大切にするとともに主が与えられた恵みを受ける楽しい時として過ごすことができるよう、導いてください。また私たちの信仰の基本に執着しつつも、他の宗教における祭りにも敬意を払い、私たちが祭りの内容を豊かにしていけるようにしてください。主イエス・キリストの名によって祈ります。）